

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 二元重

「チャットGPT」に代表される生成AIが急速に広がりを見せている。大学の現場でも、学生の話聞いていたり、チャットGPTを利用して下調べをしたという学生は多い。その内容の正確さは別にしても、キーワードを入れることでそれらしい答えが出てくるので確かに便利ではある。生成AIを授業のリポートとしてそのまま提出するのは好ましいことではない。そうした「不正行為」をチェックしなくてはならない。ただ、リポートの準備として生成AIを利用するメリットも多い。このような使い方をすれば、ルール作りが必要となる。

一方、幼児や子どものAI利用となると、話は大きく異なってくる。発達の問題と大きく関わってくる。幼児の頃から過度にAIに依存することで、人間としての能力の発達が阻害されることがあつて

論壇

AIと発育 議論拡大に期待

はいけないからだ。この点に関連して、2011年の原発事故の後、福島県で聞いた話を紹介したい。

原発事故後、福島県内では放射能汚染への警戒感が広がった。特に幼児を抱えた親は、子どもたちが外で遊んで放射能に汚染されることを恐れた。そこで子どもたちの多くが自宅で過ごす時間が増えた。これが深刻な発達や健康の問題を起したのだ。当時、地元の小児科医が話していた。幼児から子どもにかけて、少なくとも30種類以上の運動をしないと、発達に大きな障害が出るというのだ。

この運動とは、「転げる」「這り下がる」「這う」「投げる」など、日常生活の中で体験するごく普通の運動だ。ただ、放射能汚染を恐れて子どもたちを家に閉じ込めておくと、気付かないうちにこうした運動が不足し、子どもたちの発育に深刻な問題が開始するといふのだ。そこで地元の医師の方のリーダーシップで、子どもたちの運動の機会を増やす活動が広がっていった。

AIの話に戻ろう。AIの利用が広がれば、大人だけでなく、幼児や小学生の周囲にもAIを活用する環境が広がるだろう。便利さとか効率性という面ではAIを活用することのメリットは大きい。ただ、AIに過度に依存するこ

とで子どもたちが自分で悩み考える機会を減らすようなことになれば、結果として子どもたちの発育に深刻な影響が及ぶことになる。子どもたちは試行錯誤や失敗の中から多くのことを学ぶ。その学びから得られるものは一生ものである。そうした学びは教育システムのカリキュラムだけでなく、カバードできるものではない。むしろ日々の生活や遊びの中から学ぶことが多いだろう。

もちろん、AIを活用することで子どもたちの学びの機会を増やすこともあるだろう。子どもがAIに接することが全般的にダメということではない。そもそも、社会全体にAIの活用が広がる中で、子どもたちだけそこから隔離することは難しい。

今求められることは、子どもたちがAIに触れる機会が増える中で、発達にどのような影響が及ぶのか、綿密な調査や検討が必要だ。おそらく専門家の間ではそうした研究は進んでいるのだろう。ただ、AIを巡る教育システムのあり方について政策的な動きがあるようには見えない。また、こうした問題は社会全体だけでなく、個々の家庭の中で親がどう対応するのかという問題でもある。AI時代の育児や教育のあり方の議論が広がることを期待したい。